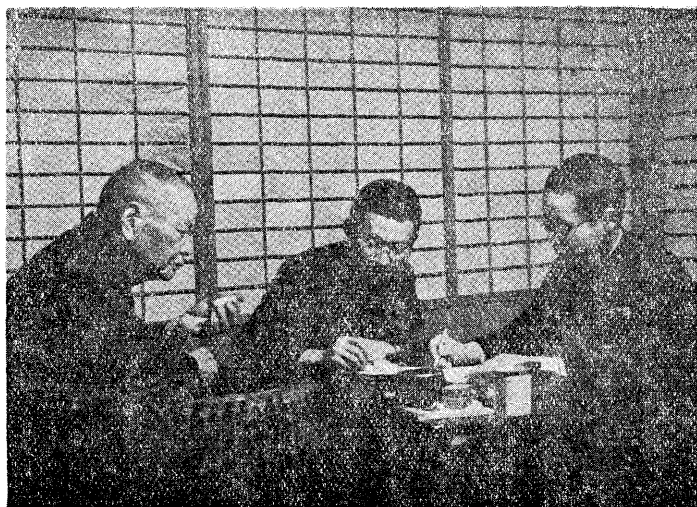


――荊の michi を――



——學生記者に六ッ川夜話を語る——

建築工學科の新設

大正十二年の大震災は、東京横濱の兩市は無論のこと、隣接の町村まで、其大部分を燒き拂つた。此の復興の爲めには土木と建築の工事が、先驅たらざるを得ない。我横濱高工は此の必要に應ずる爲め、火事場泥棒とは知りつゝも、燒け太り策を講ずることに氣が付いた。其れは土木、建築の二科増設であつた。かうした運動は、果して學校長當然の使命でありや、なきや、疑はれるのであるが、しかし今日の如き、又となき好機會を逸しては、何時まで立つても、眞實の内容は兎も角として、學校の表面的膨脹と發展が期せられない。其れで學校長は本體であるべき教育を多少留守にして火事泥稼ぎの仕事に取かゝつた。先づ學校の商議員に諮つたが、何れも震災後の社會的當面の必要と學校自體の發展から、非常に共鳴せられ、目的達成に協力を約束せられた。かくして内部は全く一致團結したので、それから當局へ對して運動を始めた。

原富太郎・中村房次郎氏等の商議員を初め、市からは市會議長の平沼亮三氏などと同伴して、再三當時交通不便な東京へ出張し、文部省當局や、大藏省の要人に面會して土木、建築の兩科の設立を懇請した。若し此等の方々の、共鳴と協力がなかつたなら、震災後政府財政の窮乏の際此策動は容易に達成しなかつたであらう。

土木工學科は許可にならなかつたことは、甚だ残念であつたが、幸にして建築工學科のみが、許可となつて、大正十四年の三月に初めて生徒を募集し、授業を開始することになつた。此れは全く我校商議員や、市の有力者の努力の賜で、忘れてはならぬことであらう。

私は土木にも、又建築にも、全く門外漢である。しかし、此兩科に付いては、平素から一つの理想を持つて居つた。鐵道、道路、港灣、特に治水の工事は、土木の學科に屬し、國家事業の重大なるもので、所謂治國平天下の根幹をなすものである。然るに土木の技師と云へば、土方の親方と云ふ様な氣分がせられてならない。最高學府の彼等學徒が、見學旅行の途次土方の歌を唱つて居るのを聞くと特に其感を深くした。彼等學徒は國家の經營と、民族の發展に、高

適なる理想と信念を、土木工學に含蓄修養しつゝありや否や、最高學府へ對し常に疑問を持つて居つた。彼の日露戰役後、我國の鐵道を廣軌に改築すべき、最好の機會を捉へなかつたから、終に其の實現を見なかつたことは、今日に於ても猶遺憾とする所である。中國の上代に禹が水を治めたことは、隣國中國に於て、千古の恩澤として残つて居る。土木が單なる技術ではない。其裏には國家厚生の大政治が潜んで居る。又土方や親方の金儲けや、惡徳政治家の利權問題ではない。それであるから土木工學を取りにがしたことが、殘念でもあり、又一種の淋しさでもあつた。

建築は藝術であり、美術である。建築から藝術味を取り去れば、低級な土木と、何も選ぶ所がないであらう。當代民族の文化を、有形的に永久に残す、最も有力なものが建築であらう。奈良の法隆寺を考へ見ても、明らかな事である。

明治、大正、昭和三代の文化の象徴を、東京驛や、丸ビルや、國會議事堂に求むるのは、余りにも貧弱であると、私としては考へざるを得ないのである。俗惡ではなからうが、單なる西

洋文化の模倣に過ぎないので、我大和民族の精神も傳統も何ら表現せられては居らない。

物理や、化學や、數學や自然科学的のものは、世界的又人類ののもので國境がない。建築は藝術的で、民族の特色を發揮して、初めて世界文化に寄與すべきである。當代文化の誇として後世に残し得る建築は、偉大なる天才、信仰、宗教、祖國愛に依つて、完成せられ得るであらう。此理想を以て、建築工學科を有する學校は、俗惡であつてはならない。

建築學科のサルコッシヨン騒ぎ

大正十四年に建築工學科が創立せられ、其四月に第一回の新入生が入學した。其年の十月三十日に恒例の、創立記念祭も盛大に舉行した直後であつたと思ふ。一夕建築學科の學生數名が、私の根岸町の私宅に來訪した。早速面會して見ると、彼等の様子が一寸おかしい。何か事件があつたかなと私に、豫感を與へた。

彼等の訴へる處は次の如くであつた。

中村順平教授は建築工學科の一年生を、甲乙丙の三つに差別した。甲は製圖の教室に於て丙を指導し、且鞭撻するものとす。丙は指導せられる代りに、甲の命令に絶対服従するの義務がある。甲の命令なら、丙は甲の爲めに煙草を買ひにやられたり、辨當の注文まで使しなければならぬ。乙は獨立自主にして、甲丙と何等の交渉を持たない。丙はサルコッションと呼ばれ、豚を意味するものである。一年生の多數はサルコッションで、蔑視も甚しと云ふべきである。猶右の趣旨を製圖の教室に、歴然と揭示せられた。此揭示は抑々學校長の命令か、將又許可したものと、血色を變へて私に明答を迫るのであつた。

勿論私には此事件は、寢耳に水であつた。併し中村君は一風變つた人じやと兼て思つて居たが、愈以て其本性を顯はして來たなど、心の中では痛快な感じもせられた。併し此れは現在教育の形式ではない。昔封建時代の私塾風を思はしむるものがあつて、愉快な點がある。教師其人を得れば此のやり方は、頗る効果的教育方法である。今の詰込み主義教育に對して、慥か

に一服の清涼劑である。よし私は中村君を後援し、塾風教育を我高工の一隅に、發育せしめようと腹の中では決心した。其處で私は彼等の詰問に對して、命令したとも、又許可したとも容易に明答を與へない。彼等が右を指せば、私は左へ向き、左を指せば、右へ向き、其間々に説教をしたり、諷刺をしたり、或は顧みて他を云ふたり、自分ながらも頗る不得要領であるかなと、心の中で苦笑しつゝ、其夜は物別れとなつた。

學校長として、此問題を取扱へば、勿論學生側の勝利で、學校の敗北である。兎に角厄介な事件であるに相違ない。従つて彼等と雖も、それで納まる筈もない。幾回か交渉を重ねたが、私は中村君と其間、一回も何等協議も交渉もしなかつた。抑々此問題は中村君が始めたものであるから、當然中村君が、其始末を付けるべきものである。中村君が勝つか、生徒が勝つか、私は今暫く傍觀することゝした。學校長の權威を以て、采配を上げることは、學校創立以來、私が希望する學風樹立の本旨に逆行するものとして、私は放任主義を取つた。

處が中村教授と多數生徒との間、意見の一致を見ず、益々双方の感情が激成して、終に多數の

生徒は、製圖室から各自の机、椅子を取り出し、バラック講堂の片隅に持ち込み、獨立の旗上げをした。而して私に向つて適當なる教師を要求した。此處まで發展して來ては、最早私の力では、打つて一丸となし、還元することが出来ない。私は直ちに彼等獨立派の請ひを容れて、新に講師として、阿部美樹志博士を招聘して、彼等を納得せしめた。

此の混亂は大事件ではあつたが、建築學科の片隅で起り、片隅で片付いて、何等の餘波を學校の他の部に及ぼさなかつた。

只嘆すべきは斯の如くにして、第一期の建築科の學生は、全く二つに分れたことであつた。之は又單なる分別でなく、犬猿吳越の如き關係が、彼等双方の一部に生じ、初めの間は、多少不穩の事まで耳にしたが、私としては別に氣にもせず、放任して置いたが、次第に問題もなくなり、一年を過ぎ二年と去り、終に彼等も卒業の間際に近づいた。毎年第三學期の半になると、各科の三年生は、教師を招待して、謝恩會を催すことは、慣例であつた。建築科では二つの謝恩會の開催が必要なので、私としては甚だ心外とせねばならなかつた。

其頃既に高工と高商との野球定期戦は、毎年初夏の頃、横濱年中行事の呼び物の一つとなり、非常に人氣を集めたものであつた。従つて兩校の應援は又頗る盛大で、應援團長の名は、校内は勿論、市民の野球ファンの内にも、能く知られたものであつた。當時の我校の應援團長は建築科三年の佐々木武雄君であつた。無論彼はサルコッションの一人で、獨立派の頭目であつた。

卒業も迫る第三學期的一天、私は佐々木を呼び、君は野球の應援團長として、見事な活動をして、大いに男を上げたことは、實に賞讃に値する。然るに君の級は不幸にして、一年以來二つに分れて、反目し融和を缺いて居る。此儘卒業し我校建築科の第一回出身者として、社會に雄飛するに、心残りがないか。我輩も此點に於て頗る遺憾とする。君が團長として磨き上げた男で、此際舊來の行掛りを一掃して、手を打つて融和一團となり、卒業して行く方策を講ずることを、我輩が君の男に期待するが、如何であらうと説いた。處が彼は即座に快諾して、間もなく其れが實現した。今の本町四丁目の若尾ビル七階の料亭で、建築學科の謝恩會が、師弟相會して催され、一年生以來のサルコッション問題は目出度解消霧散した。之で私も安心もし又

大いに愉快であつた。

中村教授もサルコッシェン問題は、四圍の狀勢を顧慮せず、餘り率直、且つ急激に、實施した事が、失敗の原因であつたことを、悟つた様であつた。それ以後の中村君は、サルコッシェンの形式はとにかくとしても、教育のサルコッシェン精神は捨てず、徐々と中村塾風を、官立高工内に樹立したことは、我建築科の特質で、全國に其名聲を昂揚したことは、偉とすべきである。

昭和十三年に私は戦地にある校友慰問のため、中國の各地を旅行した際、滿洲を通過し、中村門下出身の諸氏が、滿洲の建築の貢獻に一頭地を抜いて居る事實を見て、非常に力強き感じを催した。相當な資金をバックとして、中村君をして自由に一建築學校を經營せしめば、サゾ面白い成績が上げられるであらうと、私は想像する。中村君の様な人は、他から束縛を受けたり、牽制を受けることを、一番いやがることであらう。中村君の官立學校生活は、多分の苦痛であつたことに同情する。

中 村 順 平 君

建築工學科の創立と共に、此が初代の教授として、私の理想とする藝術に基礎を置き、横濱高工建築科の學風を樹立し得る、堪能な人物を物色した。所が東京の曾根中條建築事務所、中村順平と云ふ一寸風變りの、名古屋高工出身者で、佛國に留學して修業した人が居ることを或人から聞かされた。

曾根達藤博士は、私の前任校である藏前高工の商議員であり、且つ博士の令弟は京都同志社に於ける私の同級生であつた。そこで早速同事務所を尋ねて、曾根・中條兩氏に面談し、中村君の人物造詣等に就き聞きたゞし、兩氏の紹介を得て、日本俱樂部で、初めて中村順平君に面會した。

初對面から、私は中村君の人物に傾倒し、是非此人を招聘したいと考へ、色々と建築科の件に就き、話題を交換したが、生徒募集人員の問題に於て全く行き詰つた。生徒募集定員は毎年四十名と、官制により規定せられ居り、學校の豫算も、それに依つて編成せられて居り、學校長の勝手に左右出来ないことであつた。中村君は一學級の定員は、五名乃至六名でなければ、眞の教育は出来ないとして、頑強に主張せられるので、初對面では結論に達し得なかつた。併し乍ら私はこれは愉快じや、自分の教育上の信念を貫徹する爲に、官制も學校の豫算も、平氣で無視して居る。全く學者たる面目の一面を髣髴さして居る中村君は決して俗物ではない。しかし野馬かも知れない。野馬御し難ければ、野放しにして置くと、中村君が頑張れば頑張る程、私は執拗に喰下がつて、數回の面談を重ねて、漸く十名を減じて三十名の定員で折合ひがついた。次に待遇問題に就いては、お互に何事も談合しなかつたが、私は獨自の考へで中村君を高等官として上申した。之が法制局で引かゝつた。官歴のないものゝ初任は高等官六等以上にすることが出来ないとして、私の釋明が聽かれなかつた。其處で曾根・中條の兩氏に相談した所、兩氏は中村君は佛國のアカデミーの會員である。其の資格は佛國に於ては、頗る名譽に値する

ものである。法制局がその會員の資格に不案内であれば、佛國大使館へ聞き合せれば能く分かるであらう。併し法制局が大使館へ聞き合せをして、恥をかくぬ御注意が大切ですよと、切り出して見てはどうですと、私に入智慧をしてくれたので、私はこの入智慧で再度法制局へ出頭して、やつと無事に解決が出来た。

中村君は曾根・中條兩氏から非常に愛せられて居つた様に見えた。兩氏とも中村君に家庭を持つ様に勧誘してくれよと、度々私へ懇切な依頼があつた。私は二度中村君へ適當な女性を見出して、見合ひの寫眞を提出した。二度とも中村君は異儀なく受領せられたが、可否も語らず、斷りもせず、寫眞も返へさず、うやむやに問題を握り潰してしまつた。藝術家である中村君は、二六時中ヴィナスや、ギリシャ美人の彫刻や塑像を眺めて居るので、東洋型の美人が、氣に入らぬものと、私も諦めてしまつた。とう／＼中村君は六十幾歳の今日まで獨身で暮らして居る。まだ望みのなきものにや。

中村君は赴任後間もなき時、會計課へ行き俸給を請求した。金がなくなつたら、會計へ行けば、何時でも渡してくれるものと思つたらしい。如何にも中村君らしいので、異例であるが、會計と相談して、俸給前渡の便法を講じた。

之は又君が赴任後、何歳月を経た時の一日、校長室は何所かと尋ねて居る。傍にゐた人が君はまだ校長室が何處か知らないのかといふかると、「校長なんか減多に用がないから、知る必要がなかつた」とすましたものである。この様な事が、人をして中村君が奇人であるとか、變人であるとか、常識不足の人であるとかと、思はしむることがないでもない。併し中村君は奇人でも、變人でもない。又常識不足の人でもないのである。中村君は純情率直の人で、他人に良く思つてもらふとか、他人から自分を高く評價してもらふとか、私の最も少い人である。他から牽制されたり、束縛を受けたりすることを最も忌み嫌ふ人であつたらしい。即ち所謂自由人である。古の聖賢は能く赤子を云ひ、赤子を讃美して居る。中村君は時には全く赤子の様であると私は思ふ。

中村君は或時私の宅を訪れた。玄關まで迎へに行くと、常ならぬ顔色をして居る。私に一禮すると、中村君は言下に中條先生が死んだと泣き出した。終に座に上らず、玄關から泣きつゝそのまゝ歸つてしまつた。私は慰め様もなかつたが、後を見送り其まゝ玄關に立ちながら、なんと純情な人であらう、なんと人情味のある人であらう、所謂古聖の赤子の如き人であると、痛く私を感激せしめた。

或時又中村君は私を訪ねて來た。相對座した所、中村君の氣色が至極悪い。何か事件があつたなど、私は直覺した。君は徐ろに口を切つて、自分は辭職したい、學生から信用がないとて、可なり興奮して居る様子である。理由を聽きたゞすと、高工時報で建築科の學生が、中村君の惡口を書いたとの事であつた。幸ひ私の机上に時報があつたので、その記事を見ると、中村君の事をペーさんペーさん、と所々に書いてあるのを見出した。これは勿論中村君の順平の平で、平素から學生間の愛稱であつたらしい。私は笑つてこれは信任問題でも辭職問題でもない。これは全く滑稽なユーモア問題である。寧ろ君へ對する喜ぶべき無邪氣な愛稱であると解釋しても、容易に承知してくれない。そこで私は書棚から中國の林悟堂の著作である一書を引出し、

次の事項を中村君に示した。

$$\text{英國人} = R_2 D_2 H_2 S_1 \quad \text{佛國人} = R_2 D_2 H_2 S_2$$

$$\text{中國人} = R_4 D_1 H_2 S_2 \quad \text{日本人} = R_2 D_3 H_1 S_1$$

Rは現實主義、Dは夢、Hはユーモア、Sは感受性である。之は國民性を方程式で表はしたもので、猶此外に獨逸や露國等が擧げられて居る。私は林悟堂の著書を好んで讀み、彼の思想に共鳴する所が多いが、日本人を以て世界各國中で、最も貧弱なユーモアの所持者として居るのには大に不満で、林悟堂の認識不足に聊か不信用であつた。右の表によると、佛國人は最も豊富なユーモアの持主であるが、その佛國に學び、佛國の藝術にあこがれを持つ君でさへペーさんのユーモアを解せないとすれば、林悟堂は認識不足でない、我輩こそ認識不足であつた。さすがに林悟堂は、中國一流の評論家又文士である。頭が下がると、大に林悟堂を賞讃した。中村君は沈黙して、この書物を暫く拜借して行くとして持ち歸り、其れで問題は完全に解決した。中村君は決して頑固者ではない。主張を主義を堅固に把握して居るのみである。眞に悟れば忽ちにして、淡々豹變して、更に執着する所はない。實に君子人なるかなである。

中村君の如き人を、我が高工が持ったことは、非常に幸福であつたと私は思ふ。不幸にして時世は、中村君をして自由にその手腕を發揮せしめ得なかつた。特に戦時中はそうであつた。

私は高工の建築科を思へば中村教授を思ひ、中村教授を思へば我が建築科を思ひ出さずには居られない。眞に忘れ得ぬ人である。雑誌リーダーズ・ダイジェストに、屢々忘れ得ぬ人々と題する文が掲げられて居る。原文は忘れ得ぬマンでなく、忘れ得ぬキャラクターである。私には中村君は忘れ得ぬキャラクターである。

大 陸 會

横濱高工の使命の一つに、海外發展があつた。浪に高工の徽章はそれを表顯して居る。私は我高工に海外發展を目標とする會を作りたいと思つたが、學生自身の創意から發足したものでなければ、我校には適切でないことを思ひ、その意識で學生を指導しつゝ、時機の到來を待つ

て居つた。處が大正十四年に外務省の文化事業部で帝國大學、實業專門學校及び高等學校よりなる代表學生十七名の支那滿洲旅行見學團を組織し、夏期休暇を利用して出張せしむる事になつた。而してその團長として外務省の依頼で私が當る事になつた。一行は朝鮮を経て北はハルビン、南は上海・杭州まで、約一ヶ月間の視察見學をした。歸校の後、私は學校は勿論各所で視察旅行談を試みた。

この旅行が動機となつて、學生中に海外事情を研究するため一つの會を組織する氣運が動き出した。應用化學科の學生比嘉樽吉、齋藤興次（改姓佐藤）（比嘉君は卒業後後藤伯の抱持となり伯の邸にありしが不幸短命にて逝く）の兩君は之がため非常に努力奔走して愈々海外發展のための會の成立を見る様になつた。私は大陸會と命名した。會長に後藤新平伯を押立てんと計畫し、一日麻布の後藤伯邸に伺候し、大陸會々長になれんことを懇請した。伯は大陸會の設立には大賛成であるが、自分は會長にならない。會長はお前が當然なるべきであると却て勸誘を受けた。然らば私は會長になります、閣下が是非會員になつて頂き度いのであるが、そ

れで差支へなきやと申出た處、伯は結構であるとして、大陸會のイの一番の會員になられた。

大正十四年十月三日大陸會は學校の講堂にて盛大なる發會式を舉行した。後藤伯は態々東京から來臨せられ、一場の講演をせられたことは、大陸會に取つて實に有り難き事であつた。私は發會式の挨拶で、我日本は島國である。併し我々は島國根性の惡所を突破しなければならぬ。大陸會と云ふ名稱は、日本國は島國ではない、亞細亞大陸と陸續きでその東海岸をなして居るものと考へた所から出發したものである。政治も、産業も、經濟も、外交も、教育も皆この根本精神から樹立すべきものである。之が大陸會の名稱ある所以であることを説明し、併せて先般の旅行視察から、萬里の長城の解説を試みた。萬里の長城は世界最大の土木工事であるとして、世界の驚異である埃及の三角塔に比較して百倍近くの大規模であり、その築造に要した人夫數や、その石材等に就き現時の計算にて幾億圓の大工事であるとして、秦の始皇帝を宣揚し、且つ漢民族のため氣焰を揚げた。後で大風呂敷で謳はれた後藤伯から、お前も隨分吹くネーと諧謔を加へられたが、私はそれを一種の光榮として今猶記憶して居る。

大陸會は學校内のみならず、市民間にも多數の會員を持つて居た。會合の時に屢々出席せられた名士の内に、多年衆議院議員として盛名のあつた守屋此助氏があつた。守屋氏は大陸會と云ふ名稱は大に氣に入つたと云はれ、會の有力なる支持者であつた。又大陸會で講演した名士も數多くあつたが、當時南洋を視察して歸朝した藤山雷太氏の講演などは今尙記憶して居る。

大陸會の事業としては、又毎年夏期に滿洲及中國旅行團を作り、旅費を補助して若干の學生を見學のため出張せしめるのが恒例事業であつた。時にはこの一行に市民の會員も參加した。又二回か三回か忘れたが亞米利加まで視察旅行を延長した。それは大阪商船會社のシャトル航路の船に船員として便乗し、船がシャトルに約二週間滯船の間に適宜に上陸、視察するのであつた。間もなく大阪商船がシャトル航路を廢止した爲め、残念ながら北米旅行も自然中止せざるを得なくなつた。

柳條溝事件を發端とした滿洲事變が勃發するや、直ちに大陸會は學生二名を滿洲に派遣し、實狀を視察せしめ、歸朝後大いに事變の真相を知らして市民の覺醒を促がしたが、其後大陸の

風雲益急を告げ、後には國家の存亡を賭する大戰爭にまで發展した。大陸會は如何なる故か、大陸の戰雲が愈々濃密となるにつれ、その反對に活動は益々稀薄になり、今日に於てはその存在すら不明になつたことは返すくも残念至極であると云ふべきである。（昭和十六年三月）

横濱工業懇話會

文部省の直轄學校であるからとて、その所在地で、縣なり市なりから超然と遊離して存在すべき筈のものでなからう。出來得ることなら、學校は文化の中心となり、縣市民と密接なる關係を持ち、社會的存在の意義を持ちたきものである。そこで學校創立のドサクサも、漸次緒に就いた大正十一年の五月に、市の有志者と協議して、横濱工業懇話會を組織し、その初會をその月の十五日に横濱銀行集會所にて開催した。

發起人としては、私の外に野村洋三、渡邊利二郎、富山保、近藤賢二、秋山岩吉の數氏であ

つた。事務所を高工内に置き、庶務主任の小林長之助君が事務を處理し、規約は數ヶ條から成る至極簡單なものであつた。

事業としては、毎月十五日を例會日とし、一人の講師を招聘し、會員一同にて簡単な晚餐の後で講演を聴くのであつた。毎年七・八月の兩月は休會し、年十回の例會を催し、一ヶ年會費六圓で講師の謝禮を始め、通信料等一切を辨じた。初めの間は會員も少數で、經費の不足を生じた。かゝる場合には、會員關係の會社などから、若干の寄附金を仰いだ。

創立當時の四・五十名の會員は、一ヶ年を経過すると、百名以上に増加し、随つて講演の題目も、漸次工業上の問題よりも寧ろ政治經濟外交軍事等、範圍も廣くなり、會員も各方面の人士を網羅し、勧誘をせず自然に入會を希望する者續々として生じ、終に三百名を越ゆるに至つた。毎回の出席者も百名を下ることなく、盛會の時は百五六十名にも達し、銀行集會所の二階大食堂に溢れ、別席を設けることも度々あつた。

懇話會は會員に能く理解され、會費の集りも至つて良好で、或時は九十八パーセントの好成

續を納めた。随つて經費も潤澤になり、他より寄附を仰ぐ必要もなく、會場の銀行集會所に、特別の演壇や、必要な地圖まで若干の備品を所有する様になつた。

然るに昭和十九年に至り、戰爭は次第に形勢不利になり、サイパンが陥落し、空襲が頻々となり、一方晚餐の準備は、食料制限のため、これ又困難となつた。そのためその年の十一月の第二百二十四回の例會を以て、一時中絶するの餘儀なきに立至つたことは、實に残念至極と云はねばならない。二百二十四回と云へば、二十二年と四ヶ月の歲月である。決して短いとは云はれない。その間一回だに事故停會をしたことがなかつた。私も又如何なる幸運であつたか、一回も缺席をしなかつた。二十餘年の間には、幾回も病氣をしたり、又校用で出張もしたが、いつでも月の初めか、終りかで、定例會日の十五日を避け得たことは、今でも不思議に感ぜられる程である。

私は工業懇話會の會員の方々に對しては、一種の親しみを感じて居つた。一方又工業懇話會は、さながら我高工の後援會であるかの様に信じ、會の爲に努力するのは、恰かも私が校務に

従事するの愉快さと樂みを覺へた。又講演せられた名士の方々は、我高工の校友の一人として、加へ得た様な氣がして嬉しかった。昭和十年私の退職後も、猶引續いて懇話會のお世話をしたが、私が學校を去つても、これがため學校との親みが残り、私には楽しい奔走であつた。

それが中絶の止むなきに至つたことは、私には限りない寂寞であつた。

終戦後世間も段々と落ち付きが出來たので、會を再興したが、適當な會場がないので、高工の教室を借り、食事なしに始めた。不定期に三回程やつたが來會者が至つて少數であつた。會員住所の不明なものは、六十名以上に上り、且高工の所在も交通上不便なことも、その原因であつたのであらう。物價騰貴のため取敢えず、會費を一ヶ年三十圓としたが、またよく間に物價が暴騰して、一ヶ年三十圓の會費では、到底會の維持繼續が、困難になつて來たので、残念ながら當分休止の通知を出して、工業懇話會は二百二十七回で終りを告げた形となり、今日に至つた。假令今後復興の氣運が生じて來ても、今年八十歳の私は最早奔走の自由がきかなくなつたから、誰か新進氣鋭の人を待つより外はない。

序ながら茲に私は集會所の銀行家各位に、深甚な感謝を表します。懇話會は初めより、終りに至るまで、銀行集會所を會場とした。大震災で集會所が烏有に歸した後も、集會所の移轉先を追つて行き、御世話になつた。集會所が本來の所用の時でも讓歩してくれたこともあつた。猶戰局の推移と共に、物資の不足をかもし、毎回百人以上の食事の準備は、容易ならぬ事であつた。この困難を氣持よく、懇話會のために同情的に奉仕してくれたのが、集會所の雇人達であつた。町野君や、安藤君等に感謝の意を表する次第である。

尚懇話會の講師として、招聘した若干の方々の芳名を挙げますと次の様になります。

井坂孝	岡實	大河内正敏	有吉忠一	深井英吾	白川義則	中里介山	安達謙藏	杉村
陽太郎	權藤成郷	澤田節藏	永田秀次郎	永井松三	建川美次	白鳥敏夫	大西瀧治郎	
芦田均	本多熊太郎	徳富猪一郎	團伊能	佐々木信綱	鶴見祐輔	笹川臨風	勝田貞次	
結城豊太郎	石橋湛山等の諸氏							

之等の名士が講演の爲め來演せられるたび毎に、寒暑風雨を論ぜず、必ず横濱驛の改札口に送迎した。改札口は私にはなつがしい思ひ出の場所で、今でも時折りこの改札口を通行すると

當時のことが端なくも思ひ浮ぶのである。

猶之等講師の中には、軍人としては陸海軍の大將又は中將もあり、外交官としては大使公使もあり、政治家としては、臺閣の人もあり、その他財界、教育界、文藝科學界等の名士二百幾名が數へられる。若しその講演記録を作製したならば、優に數千頁の大冊をなすべく、之が一種の百科全書ともなるであらう。時の問題を時の人に依て提唱せられた、一種の歴史として參照せらるることであらう。

高等商業學校との同居

毎年六月の横濱高工と横濱高商との定期野球戦は、濱の早慶戦とうたはれ、たいした人氣を集めたものであつた。濱の應援者を兩分して、全く敵と味方の觀があつた。併し高商が創立開校の當時をたゞせば、全く同胞の關係にあるのである。即ち高商は高工の校舎で呱呱の聲を上

けたのであつた。

高商は大正十三年より開校の豫定であつたが、十二年の大震災の爲め開校が不可能となつた。處が全燒の災に遇つた高工は、バラックではあるが、新校舎が出来上つた。如何なる行きがかりであつたか、その経緯は忘れたが、兎に角高工のバラックを利用して豫定通り開校することとなつた。高工のバラック講堂の片隅に、校長室と事務所が設けられた。高商は教室と黒板さへあれば、當分は事缺かなかつたからである。

高商の田尻校長は偉大なる體格の持主で、私はその反對で面白い對照で毎日校門を出入した。當局者の間にも、學生間にも何等の支障を起さず、至極平穩無事に一ケ年も過ぎて、新築校舎へ引越した。震災後住宅難の折柄高商が家賃を拂はず、我々の校舎を使用して居る事に氣がつくと、淡々無慾の高工も、一寸變な慾を起した。さればと云つて家賃の請求も出来ない。其處で一案をねり上げた。この案の張本人は的確には誰であつたか忘れたが、多分大山會計主任であつたと思ふ。其處で君の方には物置がないから文部省へ請求してお作りになつたら如何で

ござる。場所と設計は當方へ御任せ下さいと合意の結果、物置を作ることになった。當時高工には職員の食堂がなかつたため、食堂になる設計で物置が作られた。建築が出来上つても、高商には入れる丈けの物件もなかつた。間もなく高商は堂々たる清水丘上の新校舎へ移り、物置が高工への置土産として残された。相當な家賃代りとなつたので、高工も恵比須顔で感謝した。

この建築物は粗末なブラックではなく、立派なほん物で職員食堂として使用せられ、又學生等の集合所として利用せられ、重寶がられたものであつた。又高商が引上げる時には、この建物の中で送別會を催し、双方の職員が相集り歡談して別れたのである。その際、このようなごやかな會合を、今後一年一回位催して懇親を重ねたいとお互に希望を述べたのであつたが、これが最初で又最後になつたことが頗る遺憾なことであつた。